

正坊とクロ

新美南吉

青空文庫

村むら^を興^{こうぎ}行^{ぎょう}して歩くサーカス団がありました。十人そこ

かるわざし

その軽業師と、年をとった黒くまと馬二とうだけの小さな団

です。馬は舞台に出るほかに、つぎの土地へうつつていくとき、

赤いラシヤの毛布などをきて、荷車をひくやくめをもしていました。

ある村へつきました。座員たちは、みんなで手わけして、たばこ屋の板かべや、お湯屋のかべに、赤や黄色ですった、きれいなピラをはって歩きました。村のおとなも子どもも、つよいインキ

のにおいのするそのビラをとりまいて、おまつりのようによろこびさわぎました。

テントばりの小屋がかかってから、三日めのお昼すぎのことでした。見物席から、わあつという歓声といっしよに、ぱちぱちと拍手の音がひびいてきました。すると、ダンスをおわったお千代ちよさんが、うすももいろのスカートをひらひらさせて、舞台うらへひきさがってきました。つぎは、くまのクロが出る番になっていました。くまつかいの五郎が、ようかん色になったビロードの上う着わぎをつけ、長ぐつをはいて、シュツシュツとむちをならしながら、おりのそばへいきました。

「さあ、クロ公、出番だ。でばんしつかりたのむよ」

と、わらいながらとびらをあげましたが、どうしたのか、クロはいつものように立ちあがってくるようすが見えません。おやと思つて、五郎がごんでみますと、クロはからだじゆうあせだくになつて、目をつむり、齒をくいしばつて、ふといいきをついてい
るのです。

「たいへんだ、団長さん。クロがはらいたをおこしたらしいです」
団長もほかの座員も、ドカドカとあつまつてきました。五郎は
団長とふたりがかりで、竹の皮でくるんだ、黒い丸薬をのませよ
うとしましたが、クロはくいしばつた口からフウフウあわをふき
ふき、首をふりうごかして、どうしても口をひらきません。しば
らくして、ピリピリツとおなかのあたりが波をうつたと思ひます

と、クロは四つんばいになって、おりの中をこまのようになってくるいまわりました。それから、わらのとくにドタリとたおれて、ふうツと大きくいきをふいて、目をシヨボシヨボさせています。

見物席のほうからは、つぎの出しものをさいそくする拍手の音が、パチパチひびいてきます。そこでとうとう、どうげやく道化役のさききち佐吉さんが、クロにかわって、舞台に出ることにしました。そのとき、だれかが、

「しょうぼう正坊がいたら、薬をのむがなあ」

と、ためいきをつくようにいいました。団長は、

「ちよそうだ。お千代、正坊をつれてこい」

と、ふといだみ声でめいじました。お千代は馬を一とうひきだし

て、ダンスすがたのまま、ひらりとまたがると、白いたんぼ道を、となり村へむかつてかけていきました。

二

正坊しょうぼうは初日しよにちのはしごのりで、足をひねってすじをつらせ、となり村の病院にはいつているのです。

正坊の病室のまどぎわには、あおぎりが葉っぱをひろげて、へやの中へ青いかげをなげいでいました。正坊は白いねまきのまま、ベッドの上にすわってあおぎりのみきは、ぞうの足みたいだなあと思いながら、ガラスのむこうをながめていました。すると、

門のほうで、ひづめの音がしました。やがてだれかが、ろうかをつたわって、こちらへやってくるようです。ドアのむこうにお千代さんの顔を見つけだすと、正坊はとびあがってよろこびました。「ねえさん、ぼく、もうなおったよ。さつきもここで、とんぼがえりをうって見たの」

お千代さんは、いつも正坊を、ほんとうの弟のようにかわいがっているのです。

「へえ、早くなおってよかったわね。あのね、正ちゃん、たいへんなのよ。クロがはらいたをおこしちやって、お薬をのませようとしても、のまないの。みんなこまっているの。だから正ちゃんをよびにきたのよ」

「クロが？　ではぼく、かえる。もう、すっかりいいんだもの」
ふたりは院長さんにおゆるしをいただいて、いつしよに馬ののつて、かえっていきました。かんごふさんは、門の外へまで出て、見おくつてくれました。

三

「クロ、ぼくだよ。クロ」

正坊しょうぼうは手のひらに丸薬をのせて、右手でかくく、クロの鼻のうえをなでさすりました。クロはさつきよりは、いくらかおちついていましたが、でも目のいろは、まだとろりとうるんで、生せ

気がありませぬ。ふうふういきをするたびに、鼻さきのわらくずが動きます。

正坊はふと思いついて、「ゆうかんなる水兵」の曲をウウウ、ウ、ウと、うたいました。

それは、いつも、正坊とクロが舞台に出ていくときの、たのしい曲なのです。クロは正坊のうた声をきいて、しばらく耳をぴくぴくさせていましたが、やがてヒヨコリと立ちあがりました。正坊がすかさず、手のひらの丸薬を口の中へおしこむと、クロはぞうさなく、ペロリとのみこみました。

こんなことがあつてから、正坊とクロは、まえよりもまたいつそう、はなれられないなかよしになり、見物人からも、団の人気

者にされました。

これも、やはり、ある村で興行こうぎようしていたときでした。いつも正坊やクロといっしょに出て、喜劇をする道化役どうけやくの佐吉さきちさんが、一座からぬけて、にげ出してしまったので、そのかわりを、ふとつた団長がつとめることになりました。

「クロ、出る番だよ」

正坊はクロをおりの中から出すと、れいによって鼻のうえをなでさすりながら、クロの大すきなビスケットを、口の中へいれてやりました。

舞台では留とめじいさんが「ゆうかななる水兵」のラツパを、ならしはじめました。

ラロララ、ラララ、

ラロ、ラロ、ラ、

ラロララ、ラロラ、

ラロ、ラロラ、

ラロ、ラロ、ラロラ、

ラロ、ラロ、ラ。

正坊は、白い鳥のはねのついたぼうしをかぶり、金ピカのおもちやのけんをこしにつるして、將軍になりすまして、クロのせなかにのっかりました。クロはラツパの音に歩調をあわせて、元氣よく舞台へ出ていきました。

「あらわれましたのは、ソコヌケ將軍に、愛馬クロにござーい」

留じいさんが口^{こうじょう}上^{じょう}をのべますと、正坊はクロのせなかから、コロリとこぼれ落ちてみせました。見物人はどつとわらつて、手をたたきました。

「將軍はただいまから、盗^{とうぞく}賊^{ぞく}たいじに出発のところでござい」
クロが、ああんとき赤い口をあけました。將軍の正坊は、クロのせなかにまたがったまま、ポケットからビスケットをつかみ出して、口の中へ入れてやりました。クロは正坊の手首までくわえてしまいました。正坊は目をパチクリさせて、またクロのせなかから、落つこちてみせて、見物人をよろこばせました。

やがて賊にふんした団長が、銀^{ぎん}紙^{がみ}をはったキラキラした大太^{おお}刀^おをひつつかんで出てきました。正坊のソコヌケ將軍は、それを

見ると、おどろいて、ブルブルふるえながら、劍けんをほうり出して、クロの首つ玉にしがみつきました。見物の子どもたちが、またどつと声をあげてわらいました。

「こらっ」

団長はつけひげをつけた、ひげだらけの顔に、するどくどがつた目をむいて、身がまえをしました。クロはちらつと、団長のそのおそろしい顔を見ました。それは団長が、いつも正坊をおこりつけるときの顔でした。そこでクロはてつきり、団長がいつものように、ほんとおこって、正坊を竹の刀でなぐりつけるのだと思いました。

「こらっ」

団長はまた、刀をふりかぶりました。と、クロは、ウオウツとひと声ほえるといっしよに、正坊のからだをかるがるとくわえて、あつといううちに、見物人の中をかけぬけて、テントの外へとび出してしまいました。これには見物人も団長も、留^{とめ}じいさんもあつげにとられてしまいました。正坊もびつくりしてしまいました。

やがて、テントの外の原っぱにおろされると、正坊は、クロの頭やせなかをやさしくなでまわして、なだめすかしました。そしてやつと、舞台へつれてかえると、まず見物席にむかつておわびをいい、賊のすがたの団長にあやまりました。見物人はかえつて、やんやとはしやぎさわいでよろこびました。団長は舞台のうしろで、にがわらいをしていました。

四

小さなサーカスは、村むらをねっしんにうってまわりましたが、みいりはほんの、みんなが、かつかつたべていけるだけの、わずかなものでした。

そのうちに、一とうの馬が病気で死んでしまいました。「おいしいことをしたなあ」と、団長をはじめ、留^{とめ}じいさんもお千代^{ちよ}さんも、正坊^{しょうぼう}も五郎も、馬の死がいをとりまいてなげきました。

それからひと月もたったある朝、目をさましてみると、団長とお千代さんと、正坊の三人きりをのこして、ほかの軽^{かる}業^{わざ}師^しは、

みんな小屋をにげ出していました。これではいよいよ、こうぎよう興行
することができなくなりました。団長もしかたなく、わかれわか
れになることに話をきめました。

クロはおりにいれられたまま、車にゆられて、町の動物園に売
られていきました。

正坊とお千代さんは、のこった一とうの馬と、テントやテーブ
ルやいすなどを売りはらって、できたお金をもらいました。

「団長さんはなんにもなくなつて、どうするの」

と、正坊がたずねますと、団長はさびしそうにわらつて、

「なんにもなくなつて家を出たんだから、なんにもなくなつて家へか
えるんだよ」

と、いいました。団長は、町の警察にたのんで、正坊とお千代さんを、メリヤス工場へすみこませてもらいました。

五

クロは町の動物園にかわれるようになってからは、まい日、力のない目で、青い空のほうばかりを見あげていました。正坊やお千代さんはどうしているんだろうなあ、もういちどあつて、あの「ゆうかんなる水兵」の曲がききたいなあ、そんなことを思いつづけてでもいるようなかっこうでした。

おりの前には、まい日、いろんなきものをきたいろんな子ども

たちが、立ちふさがりました。クロは、正坊やお千代さんが、もしかきているかもしれないと思って見まわしました。それは正坊だったら、赤と白のダンダラ服をきているから、すぐわかると思つたからでした。ゆめのように、ぼんやりそんなことを思いつづけているとき、すぐ鼻のさきで「クロ」とよぶ、ききなれた声がひびきました。クロはものうい目をあげて、声のするほうをのぞきました。

ウウウウ、ウウウ、

ウウウウウ、

ウウウウ、ウウウ、

ウウウウウ、

と、正坊は「ゆうかんなる水兵」の曲をうなりだしました。クロはきゆうにからだじゆうに、血がめぐりだしてきたように、いさましく立ちあがって、サーカスでしていたときののように、歩調をとっておりの中を歩きまわりました。それから、かなぼうの間から口を出して、なつかしそうに、正坊のほうをあおぎ見ました。ダンダラの服はきていませんでしたが、正坊にちがいないことがわかると、クロはウォーンウォーンと、のどをしぼるような、うれしなきのさけびをあげました。

正坊はにこにこしながら、ふくろからビスケットをつかみ出して、クロの口の中へ入れてやり、なんどもなんども鼻のうえをなでてやりました。

正坊のうしろでは、お千代が、なみだぐんだ目をして見ていました。ふたりは、はじめての定休日、クロを見にきたのでした。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ樁の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

初出：「赤い鳥 復刊第二卷第二号」

1931（昭和6）年8月号

入力：もりみつじゅんじ

校正：渥美浩子

1999年7月4日公開

2006年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正坊とクロ

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>